

実なことや正しいことについて熱心でないことを嫌っておられたからだと思う。つい忙しさにまぎれて、根本的な筋道を考えずに先生の前に出る時には、何か見すかされるような感じがして、先生をこわく思ったのである。

先生は日本の子どもの幸福を心から思われ、幼稚園を愛して、一生をそのことに捧げられた。ユーモアと詩情にみちた先生独得の表現の中に、何ものも犯すことのできない一筋の真情がある。その嚴肅に生きられた生涯が、この道に生きる人びとからこのように敬慕される所以であろう。この道を多彩に生きぬかれた先生は、実に先生そのものであり、他の何ものでもない。子どもの一人一人が一個のかけがえのない人間であると教えられたように、倉橋惣三先生は倉橋惣三先生である。幼稚園雑草、育ての心、保育法真諦、フレーベル、子供讃歌と流れ来り、完結した倉橋惣三先生である。

ただ子どものことを思い、純粹にそのことのために力を尽くすということは、後の世代の人々にいつまでも伝えられてゆくであろう。それぞれ表現は異なり、働らきは違っても、そのことは先生だけのものではなく、私たちすべてが共通にもつべきものであり、先生の遺志の伝えられてゆくこの道である。

## 追憶

野口 明

此の春「子供讃歌」をいただいたので、早速拜読して感想を御送りしたところ、それから一月程して御凶音に接したのであった。

私は先生と学問的交渉を持ったのではないから、斯界の權威者として尊敬はしていたが、此の御自伝によって初めて其の然る所以が判った。何新聞であったか「先覚者」の語を用いていたが、先生は明治が生んだ各方面の先覚者、先駆者の一人であったと私にも思われる。

先生は教育界に身を置かれたが、本質的にはむしろ芸術家に類して居られはしなかったか。先生の生涯の御仕事の動機は子供讃歌にあった。学問とか教育とかいかめしい道具や仕事着は持たれたが、先生の真骨頂は子供と一緒に遊ぶところ

に在ったように見える。外遊の時、ミュゼアムを歴訪されて無名の彫刻家の手に成った多数の子供像に、最大の喜びを感じられたと云う思出話は、私の最も感銘深く読んだところである。

私が始めて先生を知ったのは、昭和三年に先生が、赤坂離宮に上られて、皇后陛下に「乳幼児精神発達」の御進講を続けられた時からである。当時私は侍従になった許りで、皇后陛下の御用には関係が薄かったから、詳しい事は存じていない。ただ皇后陛下が御進講を御楽しみにしていらっしゃると云う御噂を耳にしていた。

間もなく而陛下は宮城に御移りになり、それからもずっと御進講は続き、内親王様方の御成長に伴い、御進講の内容も「兒童教育問題」になって行った。

昭和七年に呉竹寮が置かれて、学齢に御達しになった内親王様の御教育が始まった。其の頃私は呉竹寮詰の事務官になったので、先生に御会いする機会が幾分増えた。先ず第一に先生を煩わしたのは内親王様に御附添する出仕の人選であった。最初に任命されたのは、先生の推薦による女高師時代の御弟子の水谷春子（現小菌姓）さんであった。其の人選が大変良かったので、先生に對する宮内省の信用は動かないものとなり、爾來女高師から多くの人が採用されたのである。私は昭和十一年まで呉竹寮に勤務したが、其の間に先生を煩わ

して迎えた人として、安藤映子（現藪内姓）、黒木正子（現山川姓）、牧滋子（現岡姓）、川上須賀子（現榎姓）の諸氏を数えることが出来る。私共は先生の推薦は絶対の信用を置いていた。それは近代的日本女性性というものに對する先生の透徹した見識が極めて正鵠を得ていると思つたからである。此の意味に於て先生は照宮様以下多くの内親王様の御教育には、種々の意味で忘れられない人である。

昭和二十四年、図らずも私はお茶の水女子大学長に任ぜられることになった。同校で旧知と云えば実は先生が唯一の存在であった。故に先ず頭に浮んだのは先生で、僭越乍ら先生の上に立つことになるが、旧縁によつて御援助を得たいと念じた。然るに先生は御健康を幾分害されて御引籠り中と聞いて大に失望したことであった。

その頃私が敬服したことは、たしか御退官の御希望に關すること、予め人を通じて先生と打合せをした時、実に清らかで正しく、潔癖で、先生の柔かく温い外貌の中に、そうした厳しい古武士的道念の潜んでいるを發見し、先生に對する敬意を一層深めたことであった。

御退官後にも一二度御目にかかる機会があつたが、いつも春風踏蕩たる御風格を失われなかつた。子供と共に長く暮されながら、先生は人生を卒業された偉大な老人にもなつて居られた。先生の御生涯はまことに良いものであつたと祝福申

上げる次第である。

(前お茶の水女子大学長)

## 故恩師倉橋惣三先生

### をしのびて

林 成子

慈父と仰ぎ敬慕していました倉橋惣三先生は、俄かに天よりの御召で神去られました。その報に接して、只茫然としました。私の今日在るのは、実に先生のおかげです。その先生の御最後のお姿にお会いして御礼の言葉を申し上げ度、御葬儀当日、静岡発午前五時四分で東京へむかい、午前十時頃中野のお宅におうかがいして柩の前にひれ伏した時、あふれ出たとどまらなかつたのは、感謝と惜別の涙でした。私の幼児教育の道は、先生のお教で充満していたからでした。いよいよこの世でのお別れの迫る刹那特別のおはからいで、静かに平和に眠って居られる再びまみゆる事の出来ない最後のお顔をおがませていただき、「さようなら——先生」と、またも湧

き出る涙はとどまらず、青山斎場までお伴して御葬儀に列し永久の御なごりを告げたのでした。故倉橋先生から私個人に尽きない沢山のお教をいただきましたけれども、その中でも最も強く刻まれている事を少しく述べて、先生をおしのびします。

一、お茶の水女子高等師範学校保育実習科を卒業した時

「馬車馬のように身を覆って、わきみをしないで、まっすぐ前をむいて進むようにね」と言われました。雑念をもたないで、正しく精進するようにとのおさとしと思えました。

一、紙製作の研究へ

私が紙製作の研究に興味をもち、三年の後神戸で開かれた全国保育大会の席上でその発表を試み度、先生の御批評を仰ぐべく、原稿をお送りした時、何とも言えない私の期待に反した事実が起ったのでした。それは、三年位では漸く落付いた時だから、発表するのは見合せ、もう二年位たつてからするようにとのお手紙を添えられて戻って来たのです。その時私のがっかりして、しばし、先生からのお手紙をじっとながめるばかりでした。しかし、その時私の胸に脳裡に「読めた」という気持が明るみへ私を案内しました。あと二年、子供と共に生活し子供から大に学べを實際にやってみようと、自分で自分を激励しました。五年研究